
ある日のキョン子、に

シミズヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日のキョン子、に

【Nコード】

N6473H

【作者名】

シミズヒロ

【あらすじ】

いつものように楽しい？部活が始まってしばらくたって、また面倒なことが起こりそうな予感がする。ある日のキョン子、に。すたーと。

ふたたび

この世で一番嫌いな野郎にあつて、それを夢で片付けて早三ヶ月。もうすぐ一年生も終わりに近づいていた。

一年も足繁く通つて来た旧文芸部部室もといSOS団団室。

まだ始まつてばかりの高校生活に、いきなりとんでも世界にぶちこまれて心労も絶える事無くここまで来た。

やれやれ、ようやく一年経つのか。

ふたたび（後書き）

またまた始まります。ある日のキョン子。お久しぶりの方、また初めましてのかたもよろしくお願いします。

バレンタイン・デーですね いち。(前書き)

えと、中途ですけども。 キョウ子のダルさ、でてるかなあ？(汗)

バレンタイン・デーですね いち。

はあ、もうすぐ春だなあ。

去年の今頃は受験も終わってのんびりして、高校生活はごくごく普通に通に送り、それなりに青春も楽しんで……なんて夢見ていたのに。一年経つてみたら笑っちゃうほど色々あったな。

「おーっす、キヨン！元気があ？」

痛っ、なんだ谷口か？何でまたそんなに元気なんだ？

「おーいおい、春になる前にイベントが一個、有るじゃないか！忘れてるのか？そんなんじゃ涼宮がなくよお？」

……ああ、あったね。そんなイベントが、しかも今日。忘れてなんかいないよ。

だって昨日帰路に着いてのハルヒコの一言が鮮明に残っているんだから。

前日のこと……

『古泉さんにキヨン！明日は何の日だっ！』

はて、今日は確か2月の13日、明日は……

『バレンタイン・デーですね？』

ああ、あったね。そんなイベントが。

ま、俺には関係……

何となく、と言うか勝手にハルヒコに視線がいった。

ハルヒコとバチツと目が合ってしまった。

これまた何となく気恥ずかしく視線を無理やり外した。

『そう！さすが古泉さん、正解！100点！
キョン、まさか忘れてたのか？

前にいったら、俺はイベント事はきっちりやるってな！』

ああはいはい、言ってたね、最初に3年前にタイムスリップした時に。

『そこで！わがSOS団もしっかりバレンタイン・デーをやることにする！』

『で、おれたちに作ってこいって言うのか？』

つとまあその流れで持ってきてしまった甘いかおりのする物体。

苦味と甘味がマッチしたときのあのおいしさは、なんとも言い難いモノがある。

実は今日は四つ持ってきている。

SOS団の男子メンバー+1。

ハルヒコには別にもう一つ。

いっちゃんの入れ知恵とかでもなく。

なぜって？

おれがいちばんしりたいよ。

バレンタイン・デーですね いち (後書き)

感想評価、お願いします。

バレンタイン・デーですね に(前書き)

バレンタイン・パーティー当日、朝。教室に着いたキョウ子的心情や
いかに。

バレンタイン・デーですね に

ああ~~~~~。

どうしよう。

まだハルヒコは来てないが、緊張する。

いつわたそう、来てすぐ？

いやいや、それはないだろ。

「……………い、……………？キ、」

昼休み？うゝ。

それもないよな。

昼飯食つてるときだし。 謎)

「…い、聞……………？キ…ン？」

やっぱり放課後部活終わってから……………

「おいコラ！聞いてんのか！キヨン！」

「ひいやあ！」

「つんだよ、そんなにびびらなくてもいいだろ？」お、落ち着けあ
たしい、落ち着くんた。

「ぶつぶつ言つてどうした？つつか生きてる？」

「ただ大丈夫。うう、うん、生きてる。」

どーしよー、顔あげれないよお。

「熱でも有るのか？耳まで赤いぞ。」

だよねえ！赤いよねえ！だって、顔が熱いもん。

「大丈夫、大丈夫…夫、うん。大丈夫」

「あ、ああ、そう？」

よし、放課後部活が終わってから渡そう。うん、そうしよう。

「……………？」

たぶんハルヒコのやつ“？”マークを頭に浮かべてるんだろうな、
こんちくしよー！

「ふう、まあいいや、おはよ、キョン。」

ここで初めてハルヒコの顔を見た。いつものように輝かしいほどの笑顔だ。

また顔が熱くなってきた。

「う、うん、おはよ。」

それだけ言って前を向いた。

その時ちょうど担任の岡部教諭が、

「うーす！男共！バレンタイン・デーだからって期待すんなよ！」
何ていいながら入ってきた。

女子達はくすくす笑い男子達は、がやがやと騒ぎだした。

先生、心臓に悪いよ……………。

バレンタイン・デーですね (後書き)

次回、パーティが始まります。さあキヨ子はチョコをちゃんとわたせるのか？

バレンタイン・デーですね　らすと

そんなもって、放課後。

「いよおし！ふたりとも、持ってきたなあ？」

ああ、持ってきたとも。

「つつかさ、そんな言い方で出させるつもりか？」

「なんだ、キヨン？なんか不満でもあるか？」

なんて言い方をされてさらにムツとしたおれに、

「まあまあ良いじゃないですか、早く渡して少しでも落ち着いたら。」

「と、いつもの華のような笑顔を、すべてわかってます、というアイコンタクトを込めて送ってくれる。」

いや、むしろ送ってくれるな。

て言うかばれてるよ。

おれはため息を吐いて、カバンから3つきれいに包装したチョコを取り出した。

「はい。どうぞ、朝比奈さん。」

「あ、ありがとう、キヨンちゃん。」

わあ、と子供のように目を輝かせる朝比奈さん。
愛らしい。

「はい。長門。」

「……………」

わずかに頷いてチヨコを受け取ってくれた。

「何で俺が最後なんだ？」

「文句言つ奴にはやらんぞ。」

と、後ろ手に隠してみたのだが、

「うっせ、アホキヨン！」

と、前から覆いかぶさる様にして強奪された。

いやいや、朝比奈さん、そこは赤面するところじゃありませんよ、したいのはむしろおれです。

そんなんで、とりあえず一つ目クリア、かな？

チヨコを渡しおわり、いつも通りの無気力120%のSOS団は、長門の本を閉じる音で解散の合図になった。

はい。どうしようか、またテンパってきました。

「おい、キヨン。」

ななな、なんでござりましょうか。

「なにどもってるんだよ、しかもなんか変だし、

……この後ちよっと付き合え。」

と言う訳でハルヒコとの下校中。
ちよつと前をほくほく歩いていくハルヒコ。
どこにいくんだ？

「この先の公園。」

公園……………ねえ。

着いた公園はやはり変り者のメツカと化したあの公園だった。

「あいよ、ココア。」

「あ、ありがとう。」

ふふ、あつたかい、

……………な、なあハルヒコ。」

んー？と、自分のココアを飲んでいる。

「これ。」

カバンから最後の一つ、残ったチヨコを渡す。

「なに？」

チヨコだよチヨコ。

「なんで？」

と、何か期待してるようなそんな目できいてくる。

「つ、作りすぎちゃったから、ハルヒコに……………食べてもらおうかな
……………つて」

最後のほうが、尻すばみに消えていった、おれの声。

「ふーん……………さんきゅ。」

じゃ、帰るか。」

「うん。うん。」

どこか満足気のハルヒコの後ろ姿を追って、おれたちは家に帰った。

バレンタイン・デーですね らすと(後書き)

なんか、結局あっさり渡せてしまいましたね。キヨンちゃん。ハル
ヒコのおかげでしょうか。感想評価、お願いします。

鶴屋さん 鶴屋さん いち

あっさりど渡して気分も晴れた、2月の下旬。

今のところは静かにしてるコイツも、そろそろ騒ぎたてやしないかと、不安になつてゐる時期に、少し気になることが起きていた。

それは昼休みのことだった。

なんの気なしに、中庭を歩いてた俺は、偶然鶴屋さんを見かけたのだ……が、どこか様子がおかしい。

というか、怪しい。

気になつて後を付けると、何やら髪長い女生徒と、会つてゐるみたいだ。

その女生徒は後ろ姿しか見えなかつたのだが、どこか見覚えがある気がした。

声をかけようとしたのだが、その時にチャイムがなつたのでその先は分からないのだが、その後は頻繁に会つてゐるらしい。

まあ、ハルヒコに感付かれないうちに、注意しながら見てみよう。

というのが三日前のこと。

んでから今の四限目も終盤。

後ろの席では、ハルヒコが窓の外を相変わらずぼーっと眺めてゐる。よくそんなに外ばかり見てゐられるな。

少しは古典の先生の話も聞いてやれ。

「うつさい、キョン。」

何も言つてないのに。

エスパーか？コイツは。

枕草子が終わったところでチャイムがなり、うまく締めれたと先生が嬉々として教室を去り、ハルヒコが続いて教室を出、皆がばらばらと散り始めた頃合いをみて、おれも教室を出た。目指すは中庭。ジューズの自販機横。

そこからKyon The Spyの始まりだ。

……自分でキヨンなんて、もう末期だな。

「ん？キヨンちゃん？こんなところで何してるっさ？さてはハルくんと落ち合う約束かなっ？」

「つつつ鶴屋さん!？」

「どっしたっさ？そんなにあわてて、あ〜？もしかして凶星だよる？」

ち、違いますよ。

ちよっとコーヒーでも買おうかと。

「ふーん、そっか、じゃ、買ったねん。」

あ、焦った。

鶴屋さん 鶴屋さん いち(後書き)

続きどうしよっかな。汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6473h/>

ある日のキョン子、に

2010年10月8日22時37分発行